

令和元年6月4日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02021

研究課題名(和文) アメリカの人種暴力の歴史にみる記憶の政治学—エメット・ティル事件を例に

研究課題名(英文) The Politics of Memory in the U.S. History of Racial Violence: A Case Study of the Emmett Till Incident

研究代表者

坂下 史子 (Sakashita, Fumiko)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：10594129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、エメット・ティルのリンチ事件(1955年、以下ティル事件)を事例として、アメリカ合衆国(以下アメリカ)の人種暴力の歴史における記憶の政治学を考察した。当該事件をめぐる近年のさまざまな記憶化の取り組みを、シカゴ、ミシシッピ州各地、ワシントンDCにおける例を通じて詳細に検討することにより、当該事件ひいては人種暴力の歴史に関する公的記憶とアメリカ黒人社会の記憶との関係や、彼らの世代間の記憶継承・断絶の問題をも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、過去の歴史に対する謝罪や和解、補償の取り組みを考察する一連の研究群に新たな事例(アメリカの例)を提供するものである。これにより、異なる歴史認識を扱う際の問題や課題に関して、同様の事例研究ともつながる知見を得ることができた。本研究の実施内容およびこれに基づく成果は、国際社会における同様の問題を理解する一助となるだけでなく、日本の国内外での歴史認識をめぐる摩擦の問題を理解し、それを解決するための視座を提供することにもつながる。

研究成果の概要(英文)：This study examined the politics of memory in the U.S. history of racial violence through the case study of the murder of Emmett Till in 1955. By closely scrutinizing recent commemorative efforts in Chicago, Mississippi and Washington, D.C., the study clarified how public memory and vernacular memories (or national memory and local memories) of the incident have been formed over decades. It also explored the way African American vernacular memories have been maintained and/or discontinued over generations.

研究分野：アメリカ研究

キーワード：アメリカ黒人 人種暴力 記憶

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

アメリカでは近年、人種暴力や人種暴動に対する記憶化、謝罪、和解、補償などの動きが多数確認される。なかでも「リンチ」と呼ばれる人種暴力の歴史を記憶しようとする試みは、2000年代に入って顕著になり、全米(および英仏)を巡回したリンチ写真展(2000~2005)やアメリカ連邦上院議会によるリンチ犠牲者と遺族への公式謝罪決議(2005)など、国レベルの取り組みだけでなく、特定のリンチ事件を記憶しようとする地域レベルの取り組みが行われてきた。これに伴い、リンチの歴史と記憶を考察した研究も多数発表されるようになった。本研究が扱う、エメット・ティル事件をめぐるさまざまな記憶化の例も、このような社会的・学術的文脈の中に位置づけられるものである。

研究代表者はこれまで、20世紀転換期から第二次世界大戦期までのリンチ反対運動の歴史を検証する研究を国内外で発表してきたが、これらの研究に従事していたのと同時期に、アメリカでリンチの歴史を記憶しようとするさまざまな取り組みが進行していたことから、しだいに現代アメリカ社会におけるリンチの歴史をめぐる記憶化の問題に関心を持つようになった。

以来、研究代表者は、これまで清算されてこなかったアメリカの人種暴力の歴史を後世の人々や国家がどのように記憶してきたのかを明らかにする一連の研究に取り組み、上述のリンチ写真展のナラティブや上院決議の審議過程といった事例を、公的(集合的)記憶と個人の記憶がせめぎ合う場、忘却と記憶の攻防の場という側面から考察した研究成果を発表した。

こうした中、同様のせめぎ合う記憶という視点から、特にティル事件をめぐる近年のさまざまな記憶化の試みを解明したいと考えるに至った一因は、この事件が公民権運動の契機の一つとされるアメリカ人種暴力史上おそらく最も有名なリンチ事件であり、近年深刻な社会問題となっている黒人男女への警察暴力致死事件が起こるたびに、ティルの名前が引き合いに出されていたためである。

そこで、研究代表者は、本研究開始年度の前年にあたる2015年に学内の研究助成金を獲得し、遺族団体がシカゴで開催したティル事件60年追悼行事に参加、3日間にわたる関連行事を視察した。また、同年末にはワシントンDCの国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館を訪れる機会があり、同博物館におけるティル事件の展示を視察することができた。

これを踏まえて、当該事件に関する記憶の問題を公的な記憶やヴァナキュラーな記憶など多様な側面から検討するために、事件の記憶化にとって重要な3つの地域(シカゴ(ローカルな記憶が黒人主導で形成される場所...被害者遺族の記憶)、ミシシッピ州(ローカルな記憶が白人主導で形成される場所...加害者側の記憶)、ワシントンDC(国レベルの公的記憶が形成される場所))

のナラティブを比較検討することで、ティル事件をめぐる多様な記憶のせめぎ合いを明らかにするという研究を着想するに至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカの人種暴力の歴史における記憶の政治学を考察することであった。その事例として、2015年に60年を迎えたエメット・ティルのリンチ事件(1955年)をめぐる近年のさまざまな記憶化の取り組みを詳細に検討することにより、当該事件ひいては人種暴力の歴史に関する公的記憶とアメリカ黒人社会の記憶との関係のみならず、彼らの世代間の記憶継承・断絶の問題をも明らかにすることを目指した。具体的に考察対象としたのは、(1)ワシントンDCの国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館におけるティル事件の展示、(2)ミシシッピ州各地のティル事件に関する史跡、博物館、記念行事など、(3)シカゴで2015年8月に開催された遺族団体主催の60年追悼記念行事、である。

本研究は、以上のような当該事件の多様な記憶化の取り組みを、近年の事例を中心として包括的に検討するものである。特定のリンチ事件の記憶化を考察した事例研究に新たなケースを提供するのみならず、当該事件を扱った事例研究に、より最近の事例を補足する役割を果たすことも目指した。

### 3. 研究の方法

以上の目的に基づき、本研究では(1)記憶の場や公的(集合的)記憶、トラウマ、ダークツーリズムなど、本研究においてキーとなる概念の理論的な位置づけを確認するとともに、ティル事件や人種暴力の記憶に関する既存研究を整理し、(2)ティル事件の記憶化の主要な舞台であるミシシッピ州とワシントンDCを訪れ、関連する史跡や博物館などを視察した。初年度は関連文献の整理を行いながら、前年度に視察したシカゴのティル事件追悼行事の補足調査を夏季休暇中に行う予定であったが、主催者であったメイミー・ティル・モブリー記念財団の関係者とのスケジュール調整が難航し、春期休暇中の都合も合わなかったため、この部分の研究課題の遂行を断念せざるをえなかった。そのため、次年度に計画していたミシシッピ州での調査を繰り上げて行うことにした。

ミシシッピ州では、複数都市において関連する史跡や博物館などの視察を行った。たとえば、エメット・ティル記憶委員会が主催する巡礼ツアーに参加し、事件の契機となった食料品店の遺跡や殺害が行われた場所とされる納屋、遺体発見場所と考えられているタラハシー川、裁判が行われたタラハシー郡裁判所などを訪れたことにより、当該事件を地理的かつ時系列的に再構成することができた。また、同センターで開催されたワークショップへの参加、主催者への聞き取り調査、遺体廃棄場所と考えられているグレンドーラに開館した私設博物館の常設展示の観察調査

などを通じて、当該事件の現場であるミシシッピ各地で事件を記憶しようとする試みの一端を知ることができた。

なお、研究期間中に、当初の予定にはなかった調査を2件追加して行った。一つはフロリダ州立大学図書館での史料文献調査であり、もう一つはアラバマ州の公民権運動関連の博物館および史跡の観察調査である。いずれも最終年度の夏季休暇中に、一度の米国出張で遂行した。

これらの追加調査を行うことになった経緯は以下のとおりである。前者については、本研究期間2年目にあたる2017年度に当該研究課題に関する先行研究のレビューを行う中で、フロリダ州立大学の文献リサーチセンターにティル事件に関する一次史料 (David Houck Papers) が所蔵されていることが判明したため、文献調査を計画することにした。また、後者については、リンチ犠牲者を記憶する全米初の国立記念碑とこれに関連する黒人の歴史を扱った博物館が2018年4月にアラバマ州モンゴメリー市に開設されることが分かったため、こちらも研究課題遂行のためには必須の対象となると考え、調査に組み込むことにした。

以上の研究を踏まえて、当該研究課題の総括を行なった。

#### 4. 研究成果

本研究期間が開始したのは2016年度であるが、上述したように研究代表者は開始前年度に当該事件の60年追悼記念行事を視察していたため、これを踏まえて本研究期間の初年度にその他の関連文献などを検討した結果、遺族による記憶化の取り組みについて次のような知見が得られた。同記念行事ではティルが埋葬された墓地での追悼集会や、基調講演を伴う晩餐会、若者のエンパワメントを目的としたシンポジウム、葬儀が行われた教会での追悼礼拝が三日間にわたり行われ、人種暴力をめぐるアメリカ黒人の集合的記憶が形成される場となっていたが、その特徴は以下の二点に集約できる。第一に、過去と現在の犠牲者遺族の間で多様な犠牲者への追悼が行われたことから、多様な人種暴力の形態を包括的に捉えようとする試みが確認できた。第二に、本行事では人種暴力に対する闘争を継続するために世代を超えた共闘の取り組みが行われた。特にシンポジウムでは、ティル事件やその記憶化に直接関わった当事者たちが登壇者として当時の体験を共有しただけでなく、現在のさまざまな抗議運動に関わる若い世代の活動家も議論に参加し、今後の運動のあり方が模索された。こうした研究成果の一部は、2回の学会発表「From Anti-Lynching Struggles to the Black Lives Matter Movement: The Politics of Looking and Respectability Reexamined」と「Strategic Dis/continuities between Anti-Lynching and BLM Movements」および『ヴァナキュラー文化と現代社会』所収の分担執筆論文「人種暴力の記憶化と写真—『沈黙の行進』から『黒人の命も大切』運動へ」として発表した。

また本研究では、文化的影響という側面からも当該事件の記憶化の問題を検討した。エメット・ティルは公民権運動の殉教者、人種暴力の犠牲者の象徴として記憶され続け、これまでに一五〇以上の文学・文化作品の主題となっている。こうした作品の中でも、自伝などで言及される当該事件に関する回想の語り(すなわち個人的な記憶化)からは、ティル事件が黒人(特に男性)の若者にとって、自身の命のはかなさを自覚させ、ティルに起こったことが自分の身にも起こりうることを理解させる通過儀礼となっていたことが読み取れる。さらに、ティルという殉教者の物語が黒人(男性)を政治的に覚醒させたこと、またはそうした語りや、アメリカ黒人の歴史において正統なものとして紡ぎ出され、受容されている点も指摘できる。こうした視点からの研究成果の一部として、『苦悶する黒い身体』の系譜—モハメド・アリを記憶する』を刊行した。

最後に、せめぎ合う記憶という側面から当該研究課題を総括するにあたり、上述したシカゴでの追悼行事においては遺族団体主導の記憶形成が行われたこと、ミシシッピ州では公民権運動の歴史に関わるダークツーリズムの隆盛とも合わせて、2005年以降ティル事件をめぐる多様な記憶が林立する「記憶ブーム」が起こったこと、ワシントンDCの博物館では特別展示が常設されることで、ティル事件が公的なアメリカ黒人の歴史のナラティブに組み込まれたこと、アラバマ州のリンチ犠牲者記念碑では狭義の「リンチ」の解釈に基づいてティルの名前が除外されたものの、一年後に1950年代の犠牲者を記憶する新たな記念碑が設立され、ティル事件がリンチのナラティブに追加されたことなどを総合的に考察した。この研究成果の一部をまとめた論文「まちの歴史にリンチを刻む—アメリカにおける人種暴力の記憶化」は、2019年度に刊行されることになっている。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

坂下史子、「『苦悶する黒い身体』の系譜—モハメド・アリを記憶する」、『立教アメリカンスタディーズ』、査読あり、第39号、2017年、163-180頁。

〔学会発表〕(計5件)

Fumiko Sakashita, "When and Where I Entered: Intellectual Autobiography of a Japanese African Americanist," University of Puget Sound Public Lecture Series "But Some of Us Are Brave: Narratives of Scholarship, Resistance, and Activism by

Women/Womxn of Color,” 2018年。

Fumiko Sakashita, “Strategic Dis/continuities between Anti-Lynching and BLM Movements,” 黒人研究学会年次大会、2017年。

Fumiko Sakashita, “From Anti-Lynching Struggles to the Black Lives Matter Movement: The Politics of Looking and Respectability Reexamined,” アメリカ学会年次大会、2017年。

坂下史子、「モハメド・アリとは誰か—『アメリカン・レジェンド』の虚実」コメント、「アメリカの社会とポピュラーカルチャー」研究会、2016年。

坂下史子、「グローバル化する世界とアクティヴィズム」コメント、日本アメリカ史学会年次大会、2016年。

〔図書〕(計 3 件)

Yuichiro Onishi and Fumiko Sakashita, Palgrave Macmillan, *Transpacific Correspondence: Dispatches from Japan's Black Studies*, 2019, 226 pages (1-71).

ウェルズ恵子、サイモン・J・プロナー、石田文子、ジャック・サンティーノ、佐藤渉、荒このみ、リサ・ギャバート、中川典子、坂下史子、江川ひかり、トーマス・マケイン、山崎遼、関口英里、小長谷英代、ソンドラ・ウィーランド・ハウ、ディーン・L・ルート、湊圭史、宮下和子、思文閣出版、『ヴァナキュラー文化と現代社会』、2018年、330頁(139-158頁)。

兼子歩、貴堂嘉之、坂下史子、石山徳子、土田映子、大森一輝、森川未生、南川文里、南修平、藤永康政、梅崎透、和泉真澄、佐原彩子、彩流社、『「ヘイト」の時代のアメリカ史—人種・民族・国籍から考える』、2017年、297頁(27-48頁)。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

坂下史子、「人種ステレオタイプの弊害—アメリカを例に」、同志社大学人権研修会、2017年。

坂下史子、「黒人差別、米国の悲しい歴史」朝日小学生新聞第一面、2017年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者  
研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。